

Title	坂田吉雄編 明治前半期のナショナリズム
Sub Title	
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.2 (1959. 2) ,p.175(71)- 179(75)
JaLC DOI	10.14991/001.19590201-0071
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590201-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とする立場もあれば、ポールディングやウィーサーズのように、その転嫁に確信をもつ立場もある。あるいはまた、マスグレーヴ、ジャップ、コルムのように、部分転嫁を認める中間的立場もある。したがって、法人税のいかなる部分が社会の異なる経済的グループによって負担されるか、あるいは法人課税ののち税負担がいかなるひとびとに波及し帰着するか、さらにその転嫁がいかなる経済諸変数の変化を通じておこなわれるか、などに関して疑問が残されたままになっている。とりわけ、本書において二つの政策規準のうちの一つとして「分配の平等性」を掲げるならば、このような考察は不可欠と思われる。また長期的観点にたてば、法人税転嫁を否定することも容易ではない。そうであるとすれば、経済成長の下での転嫁可能な法人税の規模については、法人税率と利潤率、需要成長率、需要と供給の弾力性等の関連について、転嫁の軌跡を明確にすべき作業が残されているといえよう。

経済成長と財政支出との面をみると、まず公共投資の拡充があげられ、同時に公共投資領域が蒙るべき限界について指摘されている。確かに公共投資を通じて、完全利用成長率自体を長期的に変化させることは、その主体である公企業の国民経済に占める地位を拡大ないし縮小させることなしには、またその実施可能性からみて、困難となる。この問題はいわゆる財政投資の投資規準の問題にながっている。とくに、資本不足国における公共資本形成の重要性は、著者も指摘するように、後進国の経済開発において、社会的間

接資本の建設に高い優先度が与えられねばならないという点で、広く見解の一致をみている。この場合留意すべきは、財政投資を財政融資と公共投資とにわければ、応々にして前者が看過されることである。後者は技術的外部経済を造出するものとして論及されること少なくない。しかし、財政融資がいわゆる金銭的外部経済の造出過程を考慮しながら、資源の最適配分を維持し、またそのように民間投資を誘導することに意義が認められるならば、ここでは民間投資全体の資金計画に与える効果の上から見落すことができないのではないだろうか。財政融資と公共投資とは同じ規準が適用されるわけではない。ただ社会の生産能力におよぼす効果が明白に現われるような限界の場合には、金銭的外部経済の準則が公共投資にも適用できるであろう。

最近、ザックス、ウィクセル、リンダール、ウィーサー等の提起した財政学上の古典的課題に対する再検討の声が、サムエルソン、マスグレーヴ、ピョックらによってあげられている。これが財政学 (Public Finance) から財政政策 (Fiscal Policy) へとおこなわれた転換を、いま一度再転換せしめることを意味するかどうかは別としても、財政政策理論に問われるべき課題が、幾多残されていることを示唆するものであることは疑うべくもない。本書の通説によって誘発された私なりの感想は、著者に対して過大な要求を投げかける結果に終わったのではないかと恐れているが、現代財政政策の理論自体が発展途上にあることを考えあわせれば、読者ならびに著

者も諒とせられるに違いない。このことは同時に、本書の内容と水準がそれほど高いことを示しているものであり、まだまだ安心して私は、本書に対して望外の感想をつけ加えることができたのではないかとさえ考えている。(昭和三十三年五月、創文社刊、四八〇頁)

(古田精司)

坂田吉雄編

『明治前半期のナショナルリズム』

明治の前半期といえは、日清戦争を経てようやく本格的段階に入る日本資本主義のいわば創世期で、経済的には資本の原始的蓄積の時代、政治的には絶対主義政府成立の時代というように、その後の日本資本主義の発展を規定すべき幾多の要因を育てた重要な時期である。坂田教授を中心とする京都大学人文科学研究所日本部の人々は、昭和二十九年四月以来「明治社会の研究」というテーマで共同研究を続け、「明治前半期のナショナルリズム」と題して最近その多年の成果を発表された。

まずこの題から考えられる問題点を出してみよう。

第一にナショナルリズムの意味について。これは国家主義、民主

義、民族主義などと異なった内容の言葉に訳されるが、各国の資本主義の発展段階、及び世界資本主義の中に占める位置の差に応じてその実態は極めて変化に富むものであるから、資本主義発展の全体としての構造の中でその意味が把握されなければならない。

第二に、個々のナショナルリズムを扱う場合、その思想運動を担う階級の性質が明らかにならねばならぬし、またナショナルリズムという以上一国を包括するものであるから、その階級以外の人々のこれに対する態度、力関係を究明することによって、全体の構造が具体的に描き出されねばならない。(従来のナショナルリズムの研究は、その統一性に眼を奪われて内部の階級分析が弱く、従ってナショナルリズム運動の科学的考察が行われなかった。)

第三に、日本におけるその特殊性について。日本のナショナルリズムはきわめてユニークなものであって、ヨーロッパの初期ナショナルリズムに共通する近代国家形成の国内統一市場の成立という面がある一方、アジアの民族主義と共通する反ヨーロッパ的な面も強い。しかもアジアの先進国として、超国家主義的侵略も行ったのだから、いわば民族主義、国家主義、民族主義の三要素が、明治の前半期という短い時期の中ですでに複雑にからみ合っていたと云える。それをどのように把えるか。

第四に、日本古来の儒教思想が、外来のヨーロッパ文明受容の際に対立するのだが、それはナショナルリズムの運動とどのように関連するか。

第五に、日本の国家主義は結局ファシズムへと進展するに至ったのだが、その原因の一端は明治前半期のナショナリズムの中にあつたのではないか。あつたとすればそれへの批判。

以上の五つがこの期のナショナリズムで特に重要な問題点となるのは、それを明確に把握することが、日本の近代国家形成の特殊事情、ならびにその後の日本のナショナリズムの進展を理解する上に、欠くべからざる鍵であると私には思えるからである。

さて、このような課題を設定した場合、本書はどのように答えるか。この書は坂田教授以下新進の共同研究であつて、「明治前半期に於ける政府の国家主義」：坂田吉雄、「明治二〇年代の政論に現われたナショナリズム」：木山幸彦、「教育勅語成立の歴史的背景」：梅溪昇、「明治前期保守主義思想の一断面」：松本三之介、「教育勅語の国家主義的解釈」：源了圓、「明治二〇年代の経済思想」：飯沼二郎、「国民主義思想と農本主義思想」：伝田功、「明治二〇年代ナショナリズムとコミュニケーション」：加藤秀俊各氏の諸論文から成る。その分析視角は主として政治経済思想であるが、教育勅語、コミュニケーションなどユニークな側面をもとり上げて、なかなか多角的な分析と云えよう。

第一、ナショナリズムの概念について

坂田教授によると次の如くである。「ここではナショナリズムという言葉を、国家主義・国民主義・民族主義などを包含する類概念

義が容易に混同されるから、その各々について明確な概念の把握が必要である。ちなみに坂田氏の論文では政府の国家主義が、本山氏においては在野の歴史的ナショナリズムが、松本氏においては保守主義が、それぞれ問題となつてはいるが、相互の有機的関連を示すに足る統一の意味の確定が欲しいし、伝田氏の論文において国民主義と国家主義が混用されていることも気になることである。

第二、ナショナリズムの担い手について

この時期の主要な階層としては、絶対主義政府を形成する封建的地主・特権政商・藩閥・官僚、新興産業資本家、ブルジョア化しつつある豪農型地主等があるが、そのそれぞれのナショナリズムを坂田、本山、飯沼、伝田氏が描いてまことに興味深い。だが、いわゆる国民主義というものの階級的な基礎は何か？ 平野義太郎氏の「国民主義は、まさに、生成途上にある資本主義を保護・育成・奨励する官僚的原理であつた」(ブルジョア民主主義革命「三〇四頁」、前島省三氏の「支洋社や三宅・志賀・陸などの国民主義者は、結局は官僚国家から殆んど保護を与えられない弱少の、おくれた、地方の『日本的』産業——しかもこれは量的には非常に大きい——を代弁したのである」(「明治中期のナショナリズム」一〇〇頁、「日本のナショナリズム」昭和二八年所載)というような規定があるのだから、これに対する態度を明らかにし、これを更に発展させることが望ましい。また思想的に見れば、当時は残存する封建思想、絶対主義政府のイデオロギー、産業資本の勃興を背景とする福沢や自由

としてつかつてゐる。ナショナリズムという言葉がこの意味につかつたのは、このようなものが明治前半期の国民意識の基調をなしてゐたと考えたからである。当時の日本社会の諸現象はこの基調との結びつきを考えずには説明出来ない。しかしまた、このナショナリズムも明治二〇年代になると色々の型に分化した、それぞれの型はたがい共通面を持つと共に相異面・対立面を持つて来た。従つて、その点に注意して諸現象との連関を考えなかつたならば、諸現象の説明は平面的なものになってしまうであらう。それで私たちは、どのような型のものが、どの領域において、どのような形ではたらいたかという点に主眼を置いてこの時期のナショナリズムを分析してみたのである。(編者あとがき)その場合、ナショナリズムは「類概念」であり、分化した「色々の型」というのは、政論や勅語や農本思想やコミュニケーション等の色々の領域に現われた型の相違として扱えられ、ナショナリズムそのものの本質にかかわる複雑さとは考えられていないようである。だが、例えば元田永孚や西村茂樹らの伝統的な国家主義と、福沢論吉等の思想を、「国家的な自覚」というような抽象面だけで同日に論じたとすれば奇妙なことになる。一口にナショナリズムといつても、その階級的な立場や目的によって甚だしくその内容を異にするのであり、当時の日本の経済構造の複雑さからしても、ナショナリズムは「国民全体の意識の基調」というような平板なものではないように思われる。ことに日本では、民族成立の特殊事情からして、民族主義と国家主義、国民主

民権の思想、それから更に革命的、農民大衆的な民権運動の左派まであるので、この書が国民大衆の動向に触れるところが少ないのはいささか残念である。例えば坂田氏は、元田永孚等天皇側近の王道論的政教一致論者も自由民権派も国家主義者であることに変わりなく、同じ国家主義者の間にそれぞれ意見の対立があつたといわれている(二七頁)が、両者は異質のもので、大衆的、ブルジョアのナショナリズム(国民主義)の動きは、民権派—知識官僚の線で政府に働きかけ、封建的なイデオロギー(前近代的国家主義)と対決しつつ政府の開明性を支えていたのではないかと思われる。また極端な欧化主義を説きながらも一国の個性性、独立性をその存立の根拠とし、国権主義、民族主義を主張した福沢について、経済思想の分析だけでは十分でない。彼は「学問のすすめ」や「文明論の概略」において封建的な意識の下に国家意識のあり得ないことを痛烈に暴露し、「日本には古来政府あつても国民(ネーション)なし」と叫んで、まさにこの時期のナショナリズムの一つの典型であつたからである。また伝田氏の農本主義研究も、豪農の国家意識だけでなくそれに率いられた農民一般の分析にまで及べば極めて貴重な研究とならう。

松本氏によれば、日本のナショナリズムの歴史は、少なくとも明治時代においては、国家の政治的統合手段としての上からのナショナリズムと、国民の自覚的民族感情と主体的政治意識にもとづく下からのナショナリズムの対抗関係として捉えられるそうであるが(一六二頁)、民権論以下の下からの動きが閉却されれば、上からの

方も自然と精彩を欠く結果となる。

第三、日本におけるその特殊性について——

これについてのまとまった叙述はないが、本山氏が欧州のナショナリズムと比較して志賀重昂、三宅雪嶺、陸羯南の国粹主義を近代的、歴史的ナショナリズムとして論じている。それによると、欧州のナショナリズムは、啓蒙思想と結ぶ民主的ナショナリズムと、はじめから先進国への抵抗と民族統一という課題を担い、歴史主義、浪漫主義と結びついた歴史的ナショナリズムがあるが、羯南らが自らを等置した思想はまさに後者だとのことである(四〇―一頁)。まことに示唆に富んだ説であるが、ここでもその担い手が問題となろう。本山氏によれば、欧州のナショナリズムは、ルネサンス以来の個人主義思想と、絶対王制による上からの国家形成・国内統一市場の成立を媒介とした民族的連帯感情の発生をその前段階として先行させていたことを特色とするのである(四一頁)が、日本においてもそのような思想や連帯感を先行させていたか？ 換言すれば、それを可能にするほどブルジョア化が進んでいたか？ 飯沼氏の分析の成果を借りれば、「明治二〇年代の初めにおいて、日本経済は、なお、ようやく資本主義の軌道へ、辛じて一步を踏み出したばかりの状態にあった」(二二〇頁)。私には、このような資本主義化の未成熟、それにもかかわらず外国の圧力によって開国を迫られ、早急に国家体制を整え外国に対抗せねばならなかった事情が、日本の特殊性を規定しているように思われる。国粹と欧化、国権と民権、保

護主義と自由主義が入り乱れ、新しい事態の受けとり方、ナショナリズムのあり方は、その担い手によって実に様々であった。同じ国粹を唱えても、志賀重昂はブルジョアの生産力をその実体に考え、三宅雪嶺は精神論の世界へ逃れ、陸羯南は階級調和の仮構にその夢を托した。まして民権論に至っては、そのナショナリズムを同日に語ることはできない。このような複雑さ、多様性を、世界資本主義の全体の構造との関連において再整理することによって、初めて日本のナショナリズムの全容が明らかとなろう。そのためには、明治維新の分析が不可欠である。

第四、儒教思想とヨーロッパ文明との関連について——

本山氏によれば、重昂、雪嶺、羯南らの思想は、上からの統合ではなく、国民一人一人の内面に民族的自覚を訴える限り、近代的ナショナリズムの系譜に属し、従来の伝統的国粹主義とは同じではない(三九頁)し、松本氏によれば、保守主義は過去の否定そのものの反動として登場する伝統主義ではなく、積極的な近代化の進行過程の中から出現するものである(一三三頁)。いずれももっともであるが、そのような近代的なナショナリズムや保守主義が、やはり封建社会の儒教道徳の埃にまみれ、伝統的な国粹主義とたもとを分ち難く立ち現われてくるところが、特殊日本的と云うべきであろう。封建的な生産関係をいつまでも残した日本の保守主義者に、E・パークのような開明性を望むことは無理であるし、パークでさえ伝統主義的な面が多いのだから、日本で保守主義と伝統主義、或は伝統

的国粹主義と近代的国粹主義を区別することは実際にはほとんど不可能である。そこで国威宣揚、国粹顕彰、皇道宣布、八紘一宇等のスローガンは、当初はナショナリテイの再評価、民族的自負心等の積極的内容を持っていたとしても、結局は空虚な「国家意識」の響きを残し、新しい権力に対する道徳(一六二頁)として有効であるどころか、下からの近代化の動きに対して足を引張る結果となった。近代ナショナリズム形成の積極的な動きは、明六社——福沢——自由民権運動というヨーロッパ文明の啓蒙活動を通じて行われたのだが、この書では触れられていない。加藤氏によれば、明治一〇年代の新聞は民党系の方が読者が多かった(三二八頁)そうだが、この期のコミュニケーション・メディアの分析によって、単に国家意識の定着という以上の具体的な展開を期待したいところである。

第五、明治ナショナリズムの批判について——

狂信的な超国家主義にまで至った日本の悲劇は、ブルジョア民主主義革命を起すべき下からの近代化の動きが絶対主義専制政府の手によって阻止され、軍国的・侵略的体制へと編成されたことにその原因の一端を求められるが、そうだとすればこの期の国家主義のあり方が徹しく検討されねばならない。本山氏は、重昂、雪嶺、羯南らのナショナリズムを健全なるものと考えているが、彼等が在野の批判者であったにせよ、欧州のナショナリズムほど帝国主義的ではなかったにせよ、それが「啓蒙的主知主義に由来する欧米の模倣、具體的には、上からの資本主義政策によって生れた近代日本のアンバ

ランスを調整しようという健全な問題意識を共通に所有している」(八三頁)といえるかどうか、私には疑問である。彼等が主張した「民族的自覚」というのもその実体は反動的なものであるし、上からのアンバランスを調整するにこのような精神主義をもってすれば、フランスは崩れるばかりである。彼等が天皇の利用や軍国主義化を批判した面はあるにしても、結局は天皇を絶対化し、帝国主義政策に吸収され、その反欧国粹の論理は天皇制の強化に役立ったのではないか？ この期のナショナリズムを国家主義として語るなら、国家主義というものはつねに支配者の利益に他のものを奉仕させ、内には人権の抑圧、外には排外侵略へと進むということが注意されねばならない。坂田教授の記述にも明らかのように、政府部内においても新旧勢力はしのぎをけつり、結局政府も議会も天皇を絶対権威者と仰いで、清国と戦端を開くに至ったのである。そして明治三三年には欧米帝国主義と伍して中国の義和團事件に介入し、国内では自由党系の憲政黨が解党して、伊藤博文の立憲政友会となり、帝国主義の政策は日露戦争、滿洲事変等を招くに至った。明治の良心、明治のよき一面として郷愁を寄せる(八四頁)ためには、その後の国粹主義はあまりにも不幸な道をたどったと云わねばならない。(坂田吉雄編『明治前期のナショナリズム』未來社、四八〇円)

(白井 厚)